2026年度
全学統一入学試験

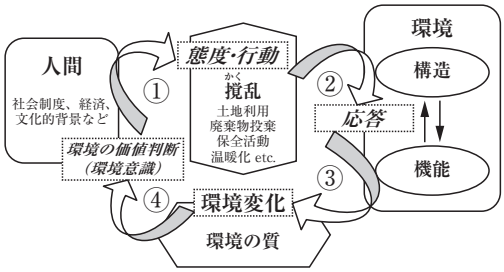
国　　語

【 注 意 事 項 】

(1) 試験監督の指示があるまでは、問題冊子を開いてはいけません。
(2) 解答時間は60分です。
(3) この問題冊子は23ページ、問題は【一】から【二】までです。
(4) 解答用紙は1枚です。
(5) 乱丁・落丁、文字等が不鮮明な箇所がある場合、手を挙げて試験監督に申し出なさい。
(6) 解答用紙には、必ず受験番号・氏名を正確に記入し、受験番号マーク欄にも受験番号を正確にマークしなさい。
(7) 解答はすべて別紙の解答用紙の所定欄にマークしなさい。
(8) 試験開始から終了までの間は、試験教室から退出できません。
(9) 問題冊子および解答用紙は室外に持ち出してはいけません。

【二】次の文章を読んで、あとの設問に答えなさい。なお、設問の都合で本文の段落に1～17の番号を付してある。

1　自然科学または環境科学において、「環境」とは、調査研究の対象として客観的に記述され、評価されるべき客体と考えられています。これに対して、「人間」は、「環境」に影響を及ぼしたり「環境」からオンケイ(ア)を被る主体として位置づけられます。相互のやり取りは想定されていますが、両者は明確に区別できるものとして考えられています。**図**においても、人間と環境を別個のものとして扱っていると言えます。しかし、**図**が、①から始まって一廻(まわ)りして④で人間に戻ってくることを考えると、人間と環境は全く異なる別個のものと言い切ることはできなくなります。実際、人々の意識や行動の起源を研究対象としている環境哲学、環境心理学、環境倫理学、環境社会学などの人文・社会学系の学問分野では、人間と環境との間のやり取りをより密度の高いものとして考察されています。



図

2　たとえば、桑子(A)(注1)は、風景に関して、「身体の配置へと全感覚的に出現する履歴空間のソウボウ(イ)（顔かたちのこと。ここでは在りようや全体像といった意味）」と定義し、「身体の配置と自己および空間の履歴」が風景を規定するとしました。また、風景における空間・事物・「わたし」(i)の三者の関係は、風景を認識したとき一挙に立ち現れると言い、このときの「わたし」と空間の関係を「身体の配置」という言葉で表現しています。空間とそこに含まれる事物、そして自己（「わたし」）にはそれぞれの履歴があり、その空間に「わたし」の身体を配置することによって、「風景」が生まれると考えることができます。

3　したがって、「わたし」という人間が、風景の構成要素として必須であることを踏まえると、自然科学が対象とする環境やいわゆる景観と、風景とは大きく異なっていると考えられます。また、空間・事物・「わたし」の三者の関係が風景によって成立するならば、風景という環境の危機（環境破壊）は、すなわち「わたし」の危機であるとも述べられています。自分ごととして環境危機を考えることの根拠、重要性が、身体の配置という行為によって根拠づけられているのではないかと思います。

4　一方で、三木清(B)(注2)は、『人生論ノート』の「人間の条件について」の中で、人間と環境の関係について哲学的な考察をしていますが、生態系や物質循環といった自然科学、環境科学の分野にも深く関わっていることがわかります。

「〔前略〕人間は形成されたものであるというのみではない、世界も形成されたものとして初めて人間的生命にとって現実的に環境の意味をもつことができるのである。生命はみずから形として外に形を作り、物に形を与えることによって自己に形を与える。かような形成は人間の条件が虚無であることによって可能である。」

5　三木は、人間と環境とは、互いに「形成」というプロセスによって

影響しあう関係、相互作用を前提とした関係であると考えています。なお、同様のことは、『哲学入門』の中でも述べられています。

「世界は要素に分解され、人間もこの要素的世界のうちへ分解され、そして要素と要素との間には関係が認められ、要素そのものも関係に分解されてしまうことができるであろう。この関係はいくつかの法則において定式化することができるであろう。しかしかような世界においては生命は成立することができない。〔後略〕」

6 前半の考察は、自然科学的、還元論的な生態系の概念、あるいは科学的研究手法と極めて整合的(ii)です。しかし、最後の文章では、そのようにして定式化された世界では生命は成立しないと言います。一体、なぜなのでしょうか。

「〔前略〕形は単なる実体でなく、単なる関係乃至(ないし)機能でもない。形はいわば両者の綜(そう)合である。関係概念と実体概念とが一つであり、実体概念と機能概念とが一つであるところに形が考えられる。」

7 環境は、その中に存在する関係と機能を明らかにしようとする、いわゆる現在の生態学や環境科学といった学問だけでは、捉えることができないということを、これらの学問が進展するずっと以前から三木は明確に認識していたのではないでしょうか。

「形成は虚無からの形成、科学を超えた芸術的ともいうべき形成でなければならぬ。一種芸術的な世界観、しかも観照的(iii)でなくて形成的な世界観が支配的になるに至るまでは、現代にはキュウサイ(ウ)がないといえるかも知れない。」

8 20世紀後半に顕著(iv)となった公害問題、さらにその後に認識されるようになってきた地球環境問題が、21世紀になっても未(いま)だに解決が非常に困難な課題であることの本質が、第二次世界大戦前の日本において考察されていたことに驚きを禁じ得ません。21世紀の現在においても、地球環境問題が解決しない、「キュウサイがない」のは、人間と環境が形成によって影響しあうという認識が十分ではないことの証しなのかもしれません。レジリエンス(注3)を育んでいく上で、人間と環境の「形成」のあり方、相互作用についての考察が不可欠であるということを示唆しているのではないでしょうか。

9 さらに、人間と環境の相互作用に関して、三木は「ディルタイの解釈学」のなかで、以下のように述べています。

「生とは先(ま)づ自我と彼の環境との間の作用連関である。生にあつては私にとつて私の自我はその環境の中に与へられている、そこに於(おい)て私は私の存在の感情をもち、私の周囲の人間及び事物に関係し、それらに対して或(あ)る態度をとる。それらのものは私の上にアッパク(エ)を及ぼし若(もし)くは私に力と存在の喜びを注ぎ込む。それらのものは私に向(むか)つて要求をもちかけ、そしてそれらのものは私の存在のうちに位置を占め

る。」

⑩ 「作用連関」という言葉を用いて、人間と環境の間に、生き生きとしたやり取りが想定されています。現代的感覚においては、人間と環境とは、ややもすると対立的、自己と他者といった異なる存在であると考えられています。言い換えれば、人間は、環境を対象物として捉えているということでもあります。しかし、実際にはそのような関係ではなく、ともに影響しあい、形成し続けるものだとされています。

⑪ 宮島(注4)によれば、環境という概念が日本で学術用語として用いられるようになったのは大正末期のことであり、その当時からこの用語を積極的に取り入れたのは三木清だそうです。その著作C『歴史哲学』において、フランス語の「ミリュウ（milieu）」の概念を使って、環境と人間を考察しています。また、『パスカルにおける人間の研究』では、中間者（milieu）という言葉を使い、人間は、全体と無のあいだの中間者、環境も全体と無の中間者として考察しています。

⑫ 「その存在において中間者であった人間はその存在性においてまた中間者である」という三木の考察について、宮島は、「『存在に於て中間者』とは『自然に於(お)ける存在』としての『人間の身体』を指し、『存在性に於てまた中間者』とは『世界に於ける存在』つまり『魂』としての『人間の精神』を指す。」としています。人間を身体と精神に分別し、環境を自然と世界に分別した上でそれぞれに人間の身体と精神が存在するものと解しているのではないかと思われます。

⑬ この人間と環境がともに中間者であるとする哲学的概念は、人間と環境の相互作用に現われる偶然性と多様性を理解する上で重要な概念ですが、ここでは、今一つ『歴史哲学』のなかで展開されている重要な三木の論考について、検討したいと思います。

⑭ 三木は、『歴史哲学』のなかで、歴史的社会的存在論を展開し、「存在としての歴史」、「ロゴスとしての歴史」、「事実としての歴史」について考察する中で、「環境」についても検討を加えています。

「存在としての歴史」

客観的に存在する歴史であり、人の主観的認識や記述に関係なく、独立に存在する出来事の生起・レンサ(オ)としての歴史

「ロゴスとしての歴史」

「存在としての歴史」についての知識及び叙述

「事実としての歴史」

歴史を作る行為そのもの

⑮ 「事実としての歴史」は、言葉の一般的な意味としては、「存在としての歴史」あるいは「客体的存在」とほぼ同義と考えられるかもしれません。しかし、三木の言う「事実」とは、行為する物、即(すなわ)ち、身体と同義であり、歴史を作る物とは、個人的な身体ではなく、社会的身体であり、この社会的身体を共有する人びとの歴史を作る行為を意味しています。これを踏まえると、「人間（わたし）」が「存在としての歴史」に関与することによって、「主体的事実」が形成（設定・同定）されると考えることが可能ではないでしょうか。この「主体的事実」をもとに

歴史を作る行為が引き出されて、新たな歴史が作られ、「存在としての歴史」に積み重なります。それを記述したものが「ロゴスとしての歴史」に相当するのではないかと思います。「存在としての歴史」に含まれる知識を記述することで「ロゴスとしての歴史」が生まれると考えられますが、「事実としての歴史」（歴史を作る行為）によって形成された歴史に関する知識を記述したものであるということもできます。また、記述する人間には、「事実としての歴史」そのものをすべて記述することや「存在としての歴史」すべてを記述することは不可能であり、それらのごく一部、虚無に等しい（記述者あるいは歴史を作った社会的身体にとっての）「主体的事実」を記述しているに過ぎないのかもしれません。

16 このようにして、「事実としての歴史」によって形成された歴史は、「存在としての歴史」に付け加えられ、新たな「主体的事実」として記述されるとともに新たな「事実としての歴史（歴史を作る行為）」につながっていくのではないでしょうか。

17 歴史を作る社会身体的行為である「事実としての歴史」は、「存在としての歴史」を前提として行われますが、この行為にとって、歴史的につくられた現実はその状況をなしています。三木は、この状況をなしている歴史的現実のことを「環境」と呼んでいます。

（吉岡崇仁「レジリエンスが育まれる『環境』とは――人間の立ち位置」による）

（注1）桑子――桑子敏雄。哲学者（1951～）。

（注2）三木清――哲学者（1897～1945）。

（注3）レジリエンス――予測しないことが起きても、逆境にあってもしなやかに適応する環境を生み出すこと。

（注4）宮島――宮島光志。哲学者（1958～）。

＊ 問題作成の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問1　傍線部（ア）～（オ）に相当する漢字を含むものを、各群の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 1 ～ 5 。

（ア）オンケイ 1

① ゴケイ関係を築く
② ケイソウ中の事件
③ モッケイを結ぶ
④ 大いにケイハツされた
⑤ イケイの念を抱く

（イ）ソウボウ 2

① 流行性カンボウ
② ビボウロクをつける
③ 美しいヨウボウ
④ ボウガイの幸せ
⑤ レイボウがよく効く

（ウ）キュウサイ 3

① 国家のサイコウを図る
② フウサイが上がらない
③ セイサイを放つ
④ 経世サイミンの精神
⑤ 矢のサイソク

（エ）アッパク 4

① 塗装がハクリする
② 異教徒をハクガイする
③ ハクラン強記の人
④ ハクヒョウを踏む
⑤ 勢力がハクチュウする

（オ）レンサ 5

① 職人をサハイする
② サモンにかける
③ 安全装置をサドウさせる
④ サコツを折る
⑤ 社長をホサする

問2　傍線部（i）～（v）の本文中における意味としてもっとも適切なものを、各群の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 6 ～ 10 。

（i）「一挙に」 6

① 物事がすべて表面に出る状態
② 物事がゆるやかに仕上がる状態
③ 物事が予想通りに進んでいる状態
④ 物事が完全に遂行される状態
⑤ 物事がまとまってすみやかに動く状態

（ii）「整合的」 7

① 正しくあるために、やり方が決まっている状態
② ずれや矛盾がなく、一致している状態
③ 相性が良くて、関係がうまくいっている状態
④ 乱れることなく、きちんとまとまっている状態
⑤ 目的を共有しているので、協力関係にある状態

（iii）「観照的」 8

① 自説に拘泥せず、多面的に対象を見つめる状態
② 多様に捉えず、画一的に対象を見つめる状態
③ 柔軟にではなく、固定的に対象を見つめる状態
④ 主観を交えず、冷静に対象を見つめる状態
⑤ 絶対的ではなく、相対的に対象を見つめる状態

（iv）「顕著」 9

① 際立って目につく状態
② 前触れもなく突然変わる状態
③ とかく問題視されている状態
④ 誰もが理解している状態
⑤ 関心がもたれている状態

（v）「相当する」 10

① ある物事から他のものが推測されている
② ある物事と他のものとが比較されている
③ ある物事の状態と他のものが合致している
④ ある物事を他のものがはるかに凌駕（りょうが）している
⑤ ある物事が他のものと一体となっている

問3　傍線部A「桑子」とあるが、彼の考えの説明としてもっとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 11 。

① 社会の中でじっくりと時間をかけて作り上げられた、空間の在りようや全体像といった履歴空間の中に、身体が配置されることによって、人間にとっての風景が形成されると考えている。

② 身体の配置と自己および空間の履歴が風景を規定することは事実として認められるわけではあるが、その風景が人間にとって必ずしも積極的な意味を持っているわけではないと考えている。

③ 風景の構成要素の中に自己が必ず含まれており、その自己が空間の中でどのように配置されるのか、他の事柄とどのような関係を持つのかということが風景にとって重要であると考えている。

④ 環境や景観を調査対象として客観的に捉え記述するのではなく、人々の意識や行動の起源の研究対象として捉え、人との関わりという観点から環境を科学的に考察すべきであると考えている。

⑤ 環境破壊などの風景という環境の危機は、人類の危機に直結する重大な問題であるが、それは環境との間のやり取りを密にしてきた人類の行為が引き起こしたものであると考えている。

問4　傍線部B「三木清」とあるが、彼を取り上げることで、筆者はどのようなことを言いたかったのか。その説明としてもっとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 12 。

① 世界は要素に分解されているが、人間も同じくこの要素的世界のうちに分解され、また要素そのものも関係に分解されるという還元主義的な概念により自然科学は論理性を保っているということ。

② 人間と環境とは互いに形成というプロセスにより影響し合う関係にあるのに、その認識が不十分であるために、21世紀の現在においても地球環境問題を解決することができていないということ。

③ いくつかの法則に基づいて定式化された世界においては、生命は成立することができないのだから、生命は科学的、論理的に認識せずに、芸術的、感性的に認識していく必要があるということ。

④ 形は単なる実体でも、また単なる関係乃至機能でもなく、これらを綜合したものであるという現在の生態学や環境科学における環境の捉え方が、第二次世界大戦前から存在していたということ。

⑤ 人間と環境との間には相互連関があり、両者は有機的な関係を構築しているのに、現代においては環境を対象化して捉えていることから、地球環境問題などを解決することができないということ。

問5　傍線部C「『歴史哲学』」とあるが、この本ではどのようなことが述べられているのか。その説明としてもっとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 13 。

① 歴史を作る行為である「事実としての歴史」や、知識や叙述である「ロゴスとしての歴史」にとって、「存在としての歴史」は、歴史を作り、叙述するための条件として捉えることができるということ。

② 「主体的事実」をもとに歴史が作られ、できあがった「存在としての歴史」に含まれる知識を記述することで生まれた「ロゴスとしての歴史」は歴史的に作られた現実であり、環境と定義されるということ。

③ 人間が「存在としての歴史」に関与することにより、「主体的事実」が形成され、「事実としての歴史」が生まれるため、「事実としての歴史」と「存在としての歴史」はほぼ同義であると言えるということ。

④ 「存在としての歴史」、「ロゴスとしての歴史」、「事実としての歴史」は、どのように歴史と認識するかがそれぞれ異なっているため、独立した歴史観を持ちながらも、一つの歴史的現実を作っているということ。

⑤ 歴史を作る物とは個人的な身体ではなく社会的な身体であるため、環境としての歴史は、人間一個人が関与して作られるのではなく、社会が総体となって客観的な存在として作られるものであるということ。

問6　本文を踏まえて考えると、図はどのようなことを示しているのか。その説明としてもっとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 14 。

① 人間が環境を客観的に認識するだけではなく、環境を主観的に認識することも必要であるが、そうなると意図しない結果として、環境に悪影響を与えることになってしまうということ。

② 人間はひとりで生きていくことが難しいので、人間と環境とがそれぞれ別個の主体として関わり合うことなく存在するのではなく、人間は環境に依存していかなければならないということ。

③ 人間のとった自己中心的な態度や行動が地球温暖化をはじめとした環境破壊を引き起こすことになったが、これからは人間と環境は共存共生していかなくてはいけないということ。

④ 人間と環境は、人間が対象化した環境と二項対立的に自己を捉えるだけではなく、環境に主体的に働きかけるとともに、環境からも人間に働きかけるという再帰的な関係であるということ。

⑤ これからは人間と環境との間のやり取りを密度の高いものにしていくことによって、人間も環境も形而上（けいじ）レベルでともに成長し、より豊かなものに変容していくことができるということ。

問7　この文章の構成に関する説明としてもっとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 15 。

① 1段落では、「環境」と「人間」を対比的に捉える自然科学や環境科学が、環境哲学や環境心理学、環境倫理学、環境社会学と、人文・社会学系に影響を与えていることを説明し、2、3段落では、その具体例を挙げている。

② 4から7段落では、三木清の『人生論ノート』を取り上げ、人間と環境の関係が論じられるが、5段落と6段落の引用以外の部分では、1から3段落と同様の考えが、6段落の引用部分と7段落では、異なった考えが論じられている。

③ 8から9段落では、4から7段落で提示された三木の考え方と21世紀の現在の状況を比較検討しながら、地球環境問題が解決できない要因を探り、10段落で、人間と環境の理想的なあり方に基づいた解決方法を提示している。

④ 11から17段落では、三木清の『歴史哲学』に基づきながら、4から10段落で具体的に議論してきた人間と環境の関係を深く掘り下げていくが、そこで鍵となるのは「中間者」という概念で、それが11段落で提示される。

⑤ 14段落では、「存在としての歴史」、「ロゴスとしての歴史」、「事実としての歴史」を提示し、15段落では、三つの歴史の関係を説明し、それを16段落でまとめ、17段落では、14段落での言及どおり環境について説明している。

問8　次のa～eの中で、本文の内容に合致するものには①を、合致しないものには②を、それぞれマークしなさい。解答番号は 16 ～ 20 。

a　人間と環境は、本来「形成」というプロセスにおいて、生き生きとしたやり取りを行っている。しかし、自然と共に生きていた時代とは異なる21世紀の現在では、昔とは違い、そのような認識を十分に持つことができていないのが実情である。 16

b　三木清は『パスカルにおける人間の研究』で、環境は全体と無の中間者として存在し、自然と世界に分別することができると考察していた。そして、そのように分別されたそれぞれに中間者としての人間の身体と精神が存在していると考えていた。 17

c　人間と環境とは相互作用を前提とした密接な関係を結んでおり、そこには偶然性と多様性がおのずと現れ出てくるようになっている。しかし、それを理解するためには、歴史的社会的存在論における環境についての考察を欠かすことができない。 18

d　人間の条件が虚無であることによって、生命がみずから形として外に形を作り、物に形を与えることによって自己に形を与えることが可能になる。人間はこのように形成されるが、世界も同じく形成されたものとして存在し、互いに影響を与え合う。 19

e　桑子は人間と風景との関係について、三木は人間と環境との関係について哲学的に考察した。このように、どちらも人文科学的なアプローチはとったが、生態系や物質循環といった自然科学の分野との関係をあまり持つことがなかった。 20

【二】次の文章は、石井敬子『文化神経科学　文化は心や脳をどのように形作るか』の一部で、リチャード・E・ニスベットをはじめとする研究者の見解を踏まえて書かれたものである。この文章を読んで、あとの設問に答えなさい。なお、設問の都合で本文の段落に1～14の番号を付してある。

1　文化的自己観の差異に対応し、人々が物事に対してどのように注意を向けて認知するかの様式にも文化差が存在する。ニスベットらは、西洋人の思考・認知様式は分析的であるとした。つまり、対象やその要素を同定し、それらの間の論理的、かつ直線的関係を定式化する傾向があるとした。これに対して、東洋人の思考・認知様式は包括的であるとした。つまり、対象やその要素そのものに注目するのではなく、それらの間の相互関係や全体的な布置を非直線的、かつ弁証法(i)的に定式化する傾向(ii)があるとした。彼らによれば、西洋文明は、個の自立を機軸に自然を理解、セイフク(ア)しようとしてきた歴史的背景があり、それによって、最も重要な対象を文脈から抜き出し、それに焦点をあてて(iii)操作するという分析的態度が顕著になった。これに対し、東洋文明は、個と社会や自然との調和を重視し、個を社会や自然の一部として理解、制御しようとしてきた歴史的背景があり、それによって、いかなる個物も全体の中に埋め込まれたものであるとする包括的態度が顕著になったと考えられる。

2　実際にこれまで数多くの研究が洋の東西の人々における認知様式の差異を見出(いだ)している。以下では、社会的推論、注意配分、カテゴリー化(iv)、変化と時間認識に着目し、代表的な知見を紹介する。

3　他者の行動を正しく理解し、その行動意図を知ることは、他者との相互作用を含む日常生活において必須である。一般的には、人は、他者の行動に対してその他者の内的属性（例えば、その人の性格や能力等）を結び合わせて推論しやすいと言われている。その上で、その行動を取り巻く状況要因を考慮し、属性に基づいたその推論を修正して最終的な解釈に至ると考えられている。このような属性推論のしやすさに関する代表的な現象の1つに、帰属の根本的錯誤がある。

4　帰属とは、他者の行為を見聞きしその原因を考えることである。そして帰属の根本的錯誤とは、ある行為が状況要因に帰属できたとしても、その行為に対応した内的特性を行為者が持っていると推測してしまう現象のことである。例えば、ジョーンズとハリスは、アメリカ人参加者に対して、キューバ共産党の指導者であったカストロに賛成または反対のエッセイを読ませ、その書き手の態度を推測させた。その際、参加者のうち半数には、そのエッセイの書き手は自由に立場を選んで書いたことが伝えられ、もう半数には、そのエッセイの書き手はその立場で文章を書くよう強制されたことが伝えられた。その結果、条件にかかわらず、参加者はエッセイの内容に対応した形で書き手の態度を推測した。立場を「強制」されたゆえにその立場と書き手の態度は本来対応していない。むしろそのエッセイの内容は「強制された」という状況要因に帰属できる。しかし参加者たちはそのエッセイの内容に対応した態度をその書き手は持っていると推測しやすかった。(イ)

5　帰属の根本的錯誤はガンケンな現象として知られている一方、これまでの知見は、東アジアの人々ではその傾向が弱いことを示している。

特に状況要因を顕著にした際、それでもアメリカ人参加者は帰属の根本的錯誤を示すのに対し、東アジア人では状況要因を考慮した推測をしやすく、帰属の根本的錯誤は生じにくい。また、エッセイの長さを操作し、書き手の態度に関する手がかりを与えた場合、日本人はその影響を受けやすいのに対し、アメリカ人は影響を受けにくい。具体的には、長いエッセイの場合、それだけ長いものを書くというのはいわば書き手がその立場にかなり思い入れがあることを示していると言える。よってそのようなエッセイは、態度を診断する上で有用である（高診断性）。一方、2、3文の短いエッセイは、書き手のその立場への思い入れが低いことを示すかもしれない。そのため態度診断の面では有用でない（低診断性）。実際日本人はこのようなエッセイの長さに反応し、書き手の本当の態度、自由に書いたときに書き手が示す態度のいずれの質問に対しても、エッセイが長い場合にはその内容に合致した態度を書き手が持っていると推測しやすかった。それに対し、エッセイが短い場合にはそのような推測を示さなかった。一方、アメリカ人参加者は、エッセイの長さにかかわらず、その内容に合致した態度を書き手が持っていると推測しやすかった。

6 B 帰属の根本的錯誤が東アジアにおいて弱くなる背景には、まず、状況要因や文脈状況が考慮されやすい点が挙げられる。以下の例でも紹介するように、東アジア人は文脈に注意を向けやすい。同様の現象は、他者の行為の原因を推測させる場合にも生じる。ある人物の行為を説明する際、アメリカ人はその人物の内的要因（例えば性格特性）に帰属させやすいのに対し、アジア人はその人物を取り巻く外的要因（例えば環境の性質）をも考慮しやすいことが知られている。また別の研究では、そのようなある人物の行為を説明する際に、アメリカ人と比較し、韓国人のほうがより多くの情報を加味しやすい。次に、そもそもアメリカ人のほうが東アジア人よりも特性に基づく推論をしてしまいがちであることも挙げられる。特に、ある人物のふるまいについての記述（例えば「仕立て屋さんは、おばあさんが購入した食料品をもって、道を横切った」）からついその人物の特性を推論（例えば「頼りになる」）してしまう現象は自発的特性推論として知られている。実際この現象はヨーロッパ系アメリカ人において特に顕著であることが示唆されている。

7 ある人の行為やある事物についての動きを理解する際、それを取り巻く状況要因や文脈を考慮する程度に文化差がある。少し古い映画だが、C「ファインディング・ニモ」(注)を思い出してみてほしい。さまざまなイソギンチャクやサンゴが揺れている中、カクレクマノミやナンヨウハギ、サメ、チョウチンアンコウなどが泳いでいる。果たしてそれらが泳いでいるシーンを見たとき、その見た内容をどのように説明するだろうか？ カクレクマノミやナンヨウハギといった中心的な魚に焦点を当てた説明になるだろうか？ それとも「これは青い海の様子を示していて、イソギンチャクはゆらゆら揺れている」といった背景情報にも言及するだろうか？ また、シーンの視聴から少し時間をおいた後、先程見た魚を思い出すように突然言われ、しかもそのシーンとは異なる背景（例えば海の色やイソギンチャクやサンゴの種類も異なっているような場合）のもとでその魚の絵を見せられたとき、果たしてその魚を先程見たかどうかを正確に答えることができるだろうか？

8　増田とニスベットは、日本人とアメリカ人参加者に対し、先の例のような水中の様子を描いた動画を示して、何を見たかを回答させた。その後、予告なしに、動画に登場した事物を思い出すように求め、その記憶成績を調べた。そのような記憶課題では、その事物は、背景なし、初めに見たのと同じ背景、初めに見たのとは異なった背景のいずれかで示された。その結果、アメリカ人と比較し、日本人は背景に言及した説明をしやすく、しかも異なった背景とともに示されたときに特にその事物の記憶成績が悪くなった。このことは、日本人がある事物を処理する際にはその背景と結びつけて知覚する傾向が強いのに対し、アメリカ人では対象となる事物をその背景と切り離して知覚する傾向が強いことを示唆する。またチュアらは、増田とニスベットが用いたある事物とその背景からなる画像を見ている際の参加者の眼球運動を調べ、中国人はアメリカ人と比較し、相対的に背景への注視回数が多く、注視時間も長いことを明らかにした。

9　加えて北山らは、刺激の社会性を最小限にした線と枠課題を考案し、その場合でも注意の向け方に関する文化差が見出されることを示した。この課題では、参加者はまずある大きさの正方形の上部中央から垂直に線が引かれている図形を示された。次にそれとは異なる大きさの正方形が示され、最初に見たものと同じ長さの線を引くか（絶対課題）[v]、または最初に見た図形の線と四角形の枠と同じ割合になるようにその2番目の図形の枠の大きさを考慮して線を引くか（相対課題）のいずれかを求められた。この相対課題では、線（中心的な事物）の長さを判断する際に枠（背景情報）の大きさを考慮しなければならないのに対し、絶対課題では、線の長さを判断する際に枠の大きさを考慮する必要がない。その結果、アメリカ人参加者と比較し、日本人参加者は相対課題における誤差が小さかった。一方、日本人参加者と比較し、アメリカ人参加者は絶対課題における誤差が小さかった。

10　さらに増田らは、よくクイズ番組で用いられるような間違い探し課題を用いて、注意配分における文化差を検討した。間違い探し課題では、20秒程度の短い動画、例えば何台かの飛行機があり、その一部が動いたり、飛び立ったりし、また背景にはカンセイトウ[ウ]があるような空港の景色を示したものが用いられた。そして、連続した2つの短い動画が提示された。それらは一見して同じものだが、中にはいくつかの差異が含まれており（例えば手前にある中心的な飛行機のマークが異なる、カンセイトウの高さが異なる等）、参加者はそれらの動画間の差異（つまり間違い）を答えるよう求められた。その結果、アメリカ人参加者は中心にある間違いを発見しやすかったのに対し、日本人参加者は背景にある間違いを発見しやすかった。

11　このような注意配分傾向は消費者行動にも関連している。この文化特有の注意配分の仕方に関連した手がかりに基づくカスタマイズを経験することで購買意欲が高まることが知られている。例えば、商品の主要なパーツを1つ1つ選択して自由に決めることができる場合、相対的に東アジアよりも西洋においてその商品が購入されやすく満足度も高いが、商品の全体像に関するいくつかの組み合わせを提示しその中から選択できる場合、むしろ東アジアにおいてその商品が購入されやすく満足度も高い。

⑫　分析的・包括的思考の文化差は、事物をどのように分類するかにも[D]表れている。チュウは、3つ組の写真セット（例えば男性、女性、子供）をアメリカ人の子供と中国人の子供の参加者に提示し、その中から相伴うような2つを選ぶよう求めた。結果は、アメリカ人の子供は、共有する特性やカテゴリーに基づいた選択（男性と女性の選択。理由：ともに大人だから）をしがちであったのに対し、中国人の子供は、二者の関係性の中で捉えられるものを選択しやすかった（女性と子供の選択。理由：母親［女性］は子供を世話するから）。

⑬　さらにジらは、このチュウの課題を言語化し、中国本土在住の中国人、アメリカ在住の中国本土もしくは台湾出身の中国人、アメリカ在住の香港もしくはシンガポール出身の中国人、そしてアメリカ在住のアメリカ人に対し、中国人には中国語もしくは英語で、アメリカ人には英語で提示することで、チュウの結果を追試するとともに、そこに言語がどのような影響を与えるのかをタンサク(エ)した。アメリカ人と中国人の反応を比べると、アメリカ人よりも中国人は全般的に関係性に基づいた選択やその説明をする傾向が強く、しかもこの差は、英語で実験を行った中国人とアメリカ人の間にも見られた。つまり、使用された言語にかかわらず、チュウの結果と一致していた。

⑭　ジらのこの研究では、中国人参加者における言語の効果も検討された。中国本土や台湾出身の参加者は、居住地域にかかわらず、英語でテイ(オ)ジされた群よりも中国語でテイジされた群の方がより関係性に基づいた判断を行っていた。一方、香港やシンガポール出身の参加者は、中国本土や台湾出身の参加者と比較し、関係性に基づいた判断をする傾向は弱く、しかも言語の効果は見られなかった。ジらは、言語の効果に関して中国人参加者間で異なった反応が見られた理由として、第2言語（この場合は英語）を獲得する時期の違いを挙げた。つまり、中国本土や台湾に比べて、香港やシンガポールでは幼い時期から英語による教育が行われるため、英語は、中国語と同様に、香港やシンガポール文化に維持されてきたコミュニケーション様式の下で習得されていくと考えられる。よって、それぞれ言語に付随する表象は類似していると言えるだろう。一方、中国本土や台湾出身の中国人のように、英語を遅い段階から習い始めると、少なくともその学習はコミュニケーション様式と独立に行われるため、それぞれの言語に付随する表象も異なると考えられる。

（注）ファインディング・ニモ――2003年公開のアメリカのアニメーション映画。カクレクマノミの父「マーリン」が子「ニモ」を探し海を冒険する物語。

＊　問題作成の都合により、本文の一部に手を加えてある。

問1　傍線部（ア）～（オ）に相当する漢字を含むものを、各群の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 21 ～ 25 。

（ア）セイフク 21

① ウイルスのセンプク期間
② ゼンプクの信頼を寄せる
③ 文書をフクシャする
④ 食前にフクヨウする
⑤ リップクして席を立つ

（イ）ガンケン 22

① ガンユウ率が高い
② ゴウガンな態度
③ 熟読ガンミする
④ ガンショクを失う
⑤ ガンメイに固執する

（ウ）カンセイトウ 23

① カンガッキを担当する
② カンタイを率いる
③ セッカン政治の始まり
④ キカン産業を担う
⑤ 生涯学習のイッカン

（エ）タンサク 24

① ゼンゴサクを講ずる
② 人名サクインを使う
③ テンサクを施す
④ 情報がコウサクする
⑤ 労働者をサクシュする

（オ）テイジ 25

① テイチョウに礼を述べる
② 花束をゾウテイする
③ 人口がテイゾウする
④ 敵情をナイテイする
⑤ 時代の推移をテイカンする

問2　傍線部（i）～（v）の本文中における意味としてもっとも適切なものを、各群の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 26 ～ 30 。

（i）「弁証法」 26

① 対立と矛盾を通じて、より高い段階の認識へと至る方法
② 試行錯誤を繰り返すことで、秩序だった状態を得る方法
③ 純粋な思考ではなく、経験を介して真理を得るという方法
④ 主観を交えず冷静な観察により、物事の本質をつかむ方法
⑤ 多くの事例を比較検討して、一つの概念を導き出す方法

（ii）「機軸」 27

① 物事の役割
② 物事の様式
③ 物事の調和
④ 物事の実態
⑤ 物事の中心

（iii）「焦点をあてて」 28

① 重要なポイントを想起させて
② 問題点が何かを具体的に理解させて
③ 特定の物事に注意や関心を向けて
④ 大局的に広い視野で物事を捉えて
⑤ 物事のあらましをかいつまんで

（iv）「カテゴリー」 29

① 経験や実践によって認識した事態
② 多くのものをまとめて捉えた観念
③ 偏らず広く全体に通じている状態
④ 同じ種類のものが含まれる部類
⑤ 時間や空間に制限されていない領域

（v）「絶対」 30

① 広くすみずみまで当てはめること
② 他と比較することができないこと
③ 自分の思ったとおりに行うこと
④ 正しい状態を導き出すこと
⑤ 理性的に物事を判断すること

問3　傍線部A「参加者たちはそのエッセイの内容に対応した態度をその書き手は持っていると推測しやすかった」とあるが、それはなぜか。その説明としてもっとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 31 。

① アメリカ人参加者は、西洋人が帰属の根本的な錯誤を犯してしまうということを認識しておらず、他者の行動意図を知ろうとするよりも、他者の内的特性に関心を持って、行為の原因を割り出す傾向があるから。

② アメリカ人参加者は、他者の行為を見たり聞いたりして、他者の行為の意図を探ろうとはせずに、その行為者の持っている能力や性格を重視することによって、その行為の原因を探ろうとする傾向が顕著であるから。

③ アメリカ人参加者は、与えられた前提がどのようなことを意味するのかを自分なりに解釈することなく、他者のとった行為を見聞することでのみ、その行為の原因がなんであるかを論理的に推論する傾向があるから。

④ アメリカ人参加者は、行動の意図を知ろうとするとき、行動を取り巻く状況を考慮に入れて、内的属性から導いた推論を修正したりはせず、行動した人物の性格特性などの内部要因に帰属させて判断する傾向があるから。

⑤ アメリカ人参加者は、自然を支配してきた歴史を持っているため、行為がどのような状況でなされたのかという分析を行うのではなく、なぜそのような行為に及んだのかという原因の分析を重視する傾向があるから。

問4　傍線部B「帰属の根本的錯誤が東アジアにおいて弱くなる」とあるが、それはなぜか。エッセイの長さを操作した研究に即した説明としてもっとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 32 。

① エッセイの文章が長くなると、書き手の性格や能力を加味しなくても、内容を読むだけで、個は社会の一部であると理解している東アジアの人びとは、どのような原因で行為したのかを診断できるから。

② エッセイの文章が短くなると、何が書いてあるのかを具体的に理解することは難しく、いくら文脈を理解することに長けている東アジアの人びとであっても、状況要因を的確に推測することができないから。

③ エッセイの文章が長くなると、自由に書いているのか強制されて書いているのかを判断する情報が多くなり、状況要因を考慮しようとする東アジアの人びとは、書き手の態度を推測しやすくなるから。

④ エッセイの文章が短くなると、態度を診断する材料が乏しくなるため、文章そのものは有用なものではなくなり、書き手の性格や能力を材料にしたとしても、東アジアの人びとは診断しにくくなるから。

⑤ エッセイの文章が長くなっても短くなっても文章の長さに関係なく、状況要因や文脈状況を考慮に入れて態度診断をすることが、包括的に物事を理解する傾向のある東アジアの人びとには可能であるから。

問5　傍線部C「「ファインディング・ニモ」を思い出してみてほしい」とあるが、この映画の例を通してどういうことを示しているのか。その説明としてもっとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 33 。

① アメリカ人は対象となる事物を背景と切り離して知覚するので、背景に関心を持つ日本人よりも、どんな状況においても、中心的な魚の記憶課題の正答率は高くなると予想できるということ。

② 日本人は状況要因や文脈状況を考慮に入れて物事を記憶しようとするため、背景が変わったり背景がなくなったりすると、中心的な魚の記憶課題の正答率が下がってしまうということ。

③ 中国人はアメリカ人や日本人と比較すると、中心的な魚よりも背景への注意回数が多かったり、注視時間が長かったりするのは、中国には東洋文明が深く浸透しているからであるということ。

④ 個と社会と自然との調和を重視する傾向が強い日本人は、中心的な魚を見るよりも周囲の環境に注意が向かうため、異なった背景を見せられると、まずそちらに目が行ってしまうということ。

⑤ 最も重要な対象を文脈から抜き出して焦点を当てるアメリカ人は、背景は考慮の外にあり、中心的な魚を記憶していても、どんなシーンで泳いでいるかは記憶にないことが多いということ。

問6　傍線部D「事物をどのように分類するか」とあるが、チュウやジの実験からどのようなことが分かったのか。その説明としてもっとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 34 。

① アメリカ在住の香港やシンガポール出身の中国人は、幼い時から香港やシンガポールで英語を学んでいるので、アメリカ人と同じように、共有する特性やカテゴリーによって、分類しようとする傾向があるということ。

② 香港やシンガポール出身の中国人も、中国本土や台湾出身のアメリカ在住の中国人も、中国人が持っている包括的な文化的自己観の影響があるために、どちらも同じように関係性に基づいた分類や選択を行うということ。

③ 中国本土在住の中国人は、英語でしめされた群よりも中国語でしめされた群の方がより関係性に基づいた分類を行うが、アメリカ在住のシンガポール出身の中国人も中国人であるので、その点は同じであるということ。

④ 同じ中国人であっても、出身がどこであるのか、居住地域がどこであるのか、英語を学んでいるのかなどによって、普遍性に基づいて分類するのか、カテゴリーによって分類するのかという点で違いが生じるということ。

⑤　台湾出身の中国人も香港出身の中国人も、アメリカ人よりも関係性で分類する傾向が強いが、香港出身の中国人は、幼い時から英語を習得しているため、台湾出身の中国人よりもその傾向が弱くなるということ。

問7　この文章の構成に関する説明としてもっとも適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 35 。

①　1段落では、本文の主張が、2段落では、「社会的推論」、「注意配分」、「カテゴリー化」という三点に着目することが示され、具体的に3段落以降で、その主張がどのような過程で生まれてきたのかを三つの論点に沿って説明されていく。

②　3段落では、属性推論の代表的な現象として「帰属の根本的錯誤」があることを示し、4段落ではアメリカ人、5、6段落では東アジア人が、それぞれどのような経過をたどって錯誤を犯してしまうのかを具体例に即しながら説明している。

③　7段落では、「ファインディング・ニモ」を具体例に映画の中の何に注意するかについての問題が提起され、8段落では、増田とニスベットが行った実験の回答において、アメリカ人と東アジア人とでは差異のあることが示されている。

④　9段落では、7から8段落で取り上げた実験などとは異なる「線と枠課題」を、10段落では「間違い探し課題」を用いて、注意配分傾向に文化差があることを再度確認し、11段落では、それが「消費活動」にまで影響していることが示されている。

⑤　12から14段落では、分割的・包括的思考の文化差が、事物をどのように分類するかでも表れていることが証明されるのだが、3から11段落とは異なり、東アジア人の中で差異が生じているという見解が最後に付け加えられている。

問8　次に示すのは、本文を読んだ後に、三人の生徒が話し合っている場面である。本文の趣旨を踏まえ、空欄に入る発言としてもっとも適切なものを、後の①～⑤の中から一つ選び、マークしなさい。解答番号は 36 。

教　師――この文章の主題は「思考や認知様式における文化差」ということでしたね。グローバル化社会を迎え、みなさんもこれからは、いろいろな国の人と接することにもなるでしょうから、このことは頭に入れておいてもよいことでしょうね。西洋文明と東洋文明とでは、思考や認知の様式が異なるということなんですが、そのようなことを感じたことがありますか。

生徒A――まだ具体的にはそんな違いは感じたことがないかな。というよりも、まだそんなに外国の人と実際に接したことがないからね。でも、他者の行動の原因も、どこに注目するかで、解釈が変わってしまうんだね。

生徒B――ほんとに。「ファインディング・ニモ」という映画が取り上げられていたけど、私も見たわ。でも、私は何に注意してみていたのかな。カクレクマノミかな、やっぱり。ひょっとしてイソギンチャクだったりして。

生徒C――でも、なぜ、アメリカ人と日本人、アメリカ人と中国人では、社会的推論や注意配分やカテゴリー化の仕方に違いが出てくるのかな。人々の動きが激しくなってきた時代だけれども、これからもその違いは続くのかな。

生徒A――これからのことは分からないよ。 ［　　］ 。

生徒B――私もそう思うな。同じ中国人でも、どこで生まれたかによって変わっているんだから、これからは個の違いでもまた変わっていくのかもしれないね。

① 今起こっている文化的自己観の違いは、物事の捉え方が影響していると思う。西洋人は物事を論理的に捉えようとするよね。なにごとも要素を同定し、有機的な関係を構築しようとする傾向があるね。東洋人はそんなことないもの。私たちってもっと感覚的だよね

② 今起こっている文化的自己観の違いは、自然とのかかわり方の問題だと思う。東洋は自然が豊かで、そんな自然の中で一人一人が人間性を形成してきたよね。でも、西洋ではいつの時代でも自然を人間の思うように扱い、利用することばかり考えていた気がする

③ 今起こっている文化的自己観の違いは、やっぱり歩んできた歴史の違いが影響していると思う。西洋人は、自立した個人を中心にして自然との関係を持っていたんだよ。それに対して東洋人は、社会や自然との調和を大切にしてきたという歴史があるんだね

④　今起こっている文化的自己観の違いは、物事の捉え方の違いだと思う。東洋人は物事を図形的に捉えて対処するのが苦手だけど、西洋人ってとても得意だよね。西洋人は物事を分析的に捉えるタイプだけれど、東洋人はそうではないってことからくるんだね

⑤　今起こっている文化的自己観の違いは、個人と社会の関係の問題だと思う。東洋人は個人よりも社会のことを考えるよね、全体主義的な態度っていうか。友達との関係もまずグループのことを考える。でも西洋人はまず自分。そんなことが影響している気がする